

名古屋女子大学

33号

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所長 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

今、私達の生活の中にはインターネットが急速に普及し、様々な情報が簡単に入手できるようになりました。このような現在の情報収集について、『情報通信白書 令和元年版』（総務省）の中で、「メディアとしてのインターネットの普及は、ポータルサイトのような『集約化』から、ブログ・SNSのような誰もが発信者になれる『双方向化』を経て、一人一人にカスタマイズされた情報が取得できる『最適化』に進んできた」と説明されています。教育の世界においても大学教育から幼児教育にまでその範囲は拡大してきていますが、本学でも前回の大学講演会のテーマとして対面と遠隔を組み合わせる授業法を取り上げました。また、機関研究における「大学における効果的な授業法の研究」グループでは、情報を共有できるインターネットを用いる新しい授業法の研究がスタートしています。このように、私たちは自分が求める情報収集において、インターネットによって多くの利便性を当たり前のように享受できるようになりましたが、最近では、一人ひとりの情報の最適化が進むことにより、世論を二極化するような社会的な問題も提起されるようになってきました。

総務省のホームページの中で、もともとある人間の傾向とネットメディアの特性の相互作用による現象として、「エコーチェンバー」^{注1)}と「フィルターバブル」^{注2)}が取り上げられています。インターネットにより、情報を必要とする側にとっては少ないエネル

ギーで情報が入手可能になるという利点がありますが、他の意見の存在に気づかなくさせる可能性があるかと警告しています。

このように、私たちは身近なネット環境に関わることから、気づかないうちに様々な人と関わる場面においても、「エコーチェンバー」と「フィルターバブル」に近い状況に陥っていないか時には問い直す必要があるのではないのでしょうか。すなわち、同じ志向を持つ人が集まることにより、他にも異なる考え方があることに気付かず、思い込みによる判断を行わないように気をつける必要があるのではないかと思います。

総合科学研究所の事業は、学部、学科、専門分野を超えた教員が協力して時代のニーズに即した研究テーマを掲げ、調査・研究を行い、成果を社会に発信しています。様々な研究グループの中で、インターネットも利用しながら様々な考え方を受容し、より本質的な研究が行われていると思っています。その中で、「エコーチェンバー」と「フィルターバブル」に似た状況にならないように注意したいものです。これは様々な差別をなくす方向にもつながっていくと思われます。総合科学研究所のスタンスをご理解いただき様々な事業にご協力いただきますようお願いいたします。

注：『情報通信白書 令和元年版』（総務省）第4節「デジタル経済の中でのコミュニケーションとメディア」より

- 1) 「エコーチェンバー」とは、ソーシャルメディアを利用する際、自分と似た興味関心を持つユーザーをフォローする結果、意見をSNSで発信すると自分と似た意見が返ってくる状況を、閉じた小部屋で音が反響する物理現象に例えたものである。
- 2) 「フィルターバブル」とは、アルゴリズムがネット利用者個人の検索履歴やクリック履歴を分析し学習することで、個々のユーザーにとっては望むと望まざるとにかかわらず見たい情報が優先的に表示され、利用者の観点に合わない情報からは隔離され、自身の考え方や価値観の「バブル（泡）」の中に孤立するという情報環境を指す。

令和2年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

本研究所が推進する「開かれた地域貢献事業」は、地域の公共施設である名古屋市の瑞穂児童館、瑞穂保健センターとの交流事業に加えて、瑞穂区役所との連携事業も順調に発展してきました。しかし昨年度は、一連のコロナ禍により、感染防止対策を講じ安全性に配慮して、一部の事業を中止し、例年とは異なる様式、規模での開催となりました。

瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、栄養・生活関係で6講座と、児童館クリスマスイベントで5つの企画を行いました。

瑞穂保健センターとの交流事業では、協議の結果、全講座を中止としました。瑞穂区役所との連携事業でも、育休復帰予定の方々向けの講座を企画し準備していましたが、中止としました。

これらはいずれも、本学各学部の教員と学生の有志、春光会、および本研究所の教職員の協力により実施でき、多くの方がご参加されました。今後も、地域の方々との触れ合いを大切にしつつ、新しい生活様式に沿って取り組んでまいります。

（文責：森屋裕治）

令和2年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

令和2年度の共催事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 レクリエーションスタッフ 猿子海人

令和2年度も新型コロナウイルスの感染拡大が続き、これまでとは生活様式が大きく変わりました。瑞穂児童館でも令和2年3月から3ヶ月間の閉館を余儀なくされました。そして、6月から様々な制限を行い、感染対策を取りながら事業を再開しました。名古屋女子大学との共催事業につきましても、コロナ禍でどのような講座を行うことができるか、どのように実施していくかを模索しながら、10月より共催企画を開始しました。

その結果、令和2年度は幅広い年齢の子ども達や保護者を対象とした6つの講座と、クリスマスイベントを実施することができました。例年とは異なり、人数制限や内容変更をしながらの開催でしたが、多くの方々に参加していただきました。その間、工夫や苦労を重ねて多様な準備をしていただいた講師の先生方や学生の皆様には、あらためて感謝申し上げます。

乳幼児親子を対象とした「子育て支援」企画では、音楽を用いた活動や身体を使った遊びなどの講座を実施しました。親子のスキン

シップを図りながら、観たり聴いたり動いたりして、とても有意義な時間になったのではないかと感じます。アンケートの結果をみても、「とても楽しかった」「また参加したい」といった意見が多くみられました。

「児童健全育成」の企画では、工作やプログラミングなどを通して、楽しみながら子ども達の創造性を引き出し、達成感を味わうことができました。また、学生に丁寧な指導をしてもらえたことで、安心して子ども達は企画に参加できたかと思います。本格的な器材などを使用し、大学という設備の整った場所での活動は、子ども達にとっても大変貴重な経験になったことでしょう。

今後も当面の間、感染防止対策を行いながらの生活や活動は続くと思われ、参加者の皆様が安心、安全に参加でき、子ども達の成長につなげていけるような楽しい企画の開催を考えると共に、名古屋女子大学と瑞穂児童館で協働しながら、地域に貢献できるようこれからも努めてまいります。



親子で楽しむ音楽あそび



プログラミングを体験しよう!



動くおもちゃづくり



クリスマスイベント

機関研究

「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」

幼児保育研究グループ

昨年度は、研究主題として、附属幼稚園の保育・教育をより本質的なものにするという視点から、「教育課程」「ドキュメンテーション」「表現」「環境」の4つに焦点を置いて取り組んできました。今年度は、昨年度の結果を土台として、引き続き4つの課題を中心に、より教育の本質を求めて進めていくことになります。「教育課程」においては幼稚園から小学校への接続の視点を明確にするとともに、園で取り組んでいる1・2歳の子育て支援活動も含めた総合的な教育課程の作成と保育の見直しを考えています。環境の一つとして取り組んだ七夕の伝統行事は、「七夕宇宙プロジェクト」というコンセプトに基づいて、各学年が保育室はもちろんのこ

と園内を子どもの創造的取り組みで表現しました。また、近年の保育現場にて注目されている「ドキュメンテーション」では、担任が常にカメラを携帯し、保育の様々な場面の写真を撮っています。子ども達との会話の広がりはもちろんのこと、保護者への配信で、より園の教育の姿勢を理解していただく機会ができつつあります。また、ICT化の充実をはかるために、Wi-Fi環境の整備を行い、iPadの導入を始めました。子ども達と様々な情報を共有しあい探求する中で、より創造的な取り組みにつなげていけるように歩み出しています。

(文責：森岡とき子)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究9」

～本学教育に適した効果的なインストラクショナルデザインに関する研究～

竹内正裕(代)・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・杉原央樹・羽澄直子・服部幹雄・三宅元子・吉川直志

今年度から、「大学における効果的な授業法の研究9」として、本学教育に適した効果的なインストラクショナルデザインに関する研究を行います。インストラクショナルデザインとは、「教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを活用して学修支援環境を実現するプロセスのこと」です。平成30年の中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、学修者本位の教育への転換を掲げています。「何を教えたか」から学修者自身が「何を学び、身

に付けることができたのか」へ転換していくこと、そして、生涯学び続ける体系への移行などが重要であるということを提言しています。特に学修者が生涯学び続けるためには、様々な授業法（対面、遠隔、eラーニング等）をデザインして、学生自らが学修を設計できるようになることが重要であると考えられます。本研究は本学の学部・学科の特性に応じたインストラクショナルデザインの探究を目的とします。

(文責：竹内正裕)

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

佐々木基裕(代)・河合玲子・勅米良祐太・遠山佳治・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は令和元年度～3年度の3年間にわたって行われるものです。本年度は、その最終年度に当たります。前期研究を引き継ぎながら、越原春子先生の建学の精神、教育理念を戦後昭和期の日本の女子教育史の中に位置付けていく共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究を同時並行に進めています。

共同研究においては、学校情報の整理を目的とした関連教職員へのインタビューを計画しております。これまでも、本学に長く勤め

られた先生方への聞き取り調査を行ってきました。本年度も、さらに詳細な女子教育の歴史叙述を目指しています。

個人研究に関しては、研究メンバーが自らの専門性に基づいた研究を進めております。短期大学、大学開設へと至る戦後昭和期の本学の状況を念頭に置きながら、教育学、歴史学、音楽学、社会学等のメンバーが有する専門性を活かし、学際的な観点からの総合的な検討へ向け、研究を進展させていきます。

(文責：佐々木基裕)

機関研究

「食と健康に関する研究」

近藤浩代(代)・大曾基宣・小椋郁夫・駒田格知・近藤志保・高橋哲也

本研究では、人体の消化器系の入口である口腔器官の発達や系統発生と個体発生に関わる視点から、食と健康に関する研究を行い、よりよい食育の普及を行っています。前年度までに「咀嚼」に関する冊子を作成し、東海3県の関係教育委員会および小学校における生徒と教師の反応をとらえ、教育への活用を行っており、本年度は現場の活動に加えてこれらの効果を検証します。また、卒後教育研究会の学修媒体として活用し、遠隔研修における食育効果の調査を行い、2冊目の食育冊子が完成し、本年度に詳細な検証を行う計画です。

さらに昨年度に計画された名古屋女子大学付属幼稚園の食と健康（安全）に関する研究について、講座や食育活動の具体案を進め順次実施することによって、付属幼稚園の食育の発展に寄与してまいります。また、新たな食育媒体（食と健康 紙芝居フリップ）も作成中であり、実施・検証を行ってまいります。

このように本研究会では、口腔内の健康や咀嚼の大切さと食と健康の重要性を普及するとともに、活用や傾向を解析し実証を行い、より効果の高い食育の実践と方法の開発に役立ててまいります。

(文責：近藤浩代)

プロジェクト研究

「学生の保育パフォーマンスを高めるための評価方法を導入した保育実習指導について」

～領域「表現」を中心とした保育実践にルーブリック指標によるPA(パフォーマンス・アセスメント)シートを活用した取り組み～

平澤節子(代)・山本麻美

本研究は、実習指導における保育実践時に、ルーブリック指標を用いたPA(パフォーマンス・アセスメント)シートを活用し、自己または他者からの評価を通して、保育パフォーマンスの向上を目指すものです。

現段階では、対象とする保育実践について、保育実習中に部分実習として取り上げられる機会が多い内容を、音楽・造形表現の分野から選定し、保育実践時に必要な個人の発表技法(パフォーマンス)をはじめ領域「表現」の観点から、指導計画の留意点や年齢に合った説明方法などについてまとめ、実習指導時のテキストとして

教材開発を進めています。それと並行し、PAシートとして使用するルーブリック指標の観点項目と評価基準の検討を行っています。今後は、実際にPAシートを活用しながら模擬保育を行い、ルーブリック指標による評価をレーダーチャートによって可視化し、学生が自己の課題を明確にしやすい評価方法について検証していきます。ルーブリック指標を用いることにより、評価の観点が学生の中に養われ、実践と省察とを繰り返す学修環境について研究を進めて参ります。

(文責：平澤節子)

令和3年度地域貢献事業計画

本研究所では瑞穂児童館、瑞穂保健センター、瑞穂区役所と各々連携した地域貢献事業を企画・運営しています。例年4月に学部学科の特徴を活かした企画を学内募集しますが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、瑞穂児童館との共催事業のみの募集となりました。参加人数や時間が制約されるなど感染対策が求められる状況ですが、継続の講座だけでなく新しい企画の応募もありました。瑞穂児童館と実施方法等を十分に協議し、プログラミングやお菓子作りを体験する講座を9講座、クリスマスイベント4

講座を10月から3月に開催予定です。ご期待ください。

瑞穂保健センターとの共催事業である高齢者を対象とした「若返りきらきらセミナー」は、事業としては継続の予定ですが、今年度の講座の開催については協議中です。瑞穂区役所との共催事業である「育休復帰応援講座」も継続して実施予定です。年度末の開催を目標にコロナ禍でも可能な実施方法を検討しています。

(文責：山中なつみ)

令和3年度「開かれた地域貢献事業」予定

開催日	テーマ	担当講師	開催場所
2021年			
10月10日(日)	身の回りの菌とキレイを見てみよう!	健康科学部・健康栄養学科 近藤浩代	瑞穂児童館
10月29日(金)	親子で楽しむ音楽あそび	文学部・児童教育学科 吉田 文	瑞穂児童館
10月30日(土)	よくかむおやつを作ろう!	健康科学部・健康栄養学科 近藤貴子 辻 美智子 山田久美子	名古屋女子大学
11月27日(土)	プログラミングを体験しよう!	短期大学部・生活学科 武岡さおり	名古屋女子大学
12月 5日(日)	みんなでメリークリスマス!	文学部・児童教育学科 吉川直志 吉田 文 短期大学部・生活学科 森屋裕治 短期大学部・保育学科 河合玲子	瑞穂児童館
12月18日(土)	楽しいクッキー作り	健康科学部・健康栄養学科 片山直美	名古屋女子大学
2022年			
1月 9日(日)	木材を利用したおもちゃづくり	文学部・児童教育学科 渋谷 寿 吉川直志	瑞穂児童館
2月20日(日)	乳幼児の食育相談	同窓会・春光会	瑞穂児童館
2月26日(土)	タブレットでかんたんプログラミング	短期大学部・保育学科 神崎奈奈	名古屋女子大学
3月 6日(日)	うごくおもちゃづくり	文学部・児童教育学科 吉川直志	瑞穂児童館

※新型コロナウイルス感染症の感染状況等により、変更される場合があります。

今年度(令和3年度)運営委員

委員長	森屋 裕治 MORIYA Yuji (短期大学部)	河合 玲子 KAWAI Reiko (短期大学部)	羽澄 直子 HAZUMI Naoko (文学部)
	福田 峰子 FUKUTA Mineko (健康科学部)	三宅 元子 MIYAKE Motoko (家政学部)	

研究所メンバー

所長	渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi	顧問	河村 瑞江 KAWAMURA Mizue	主任	山中 なつみ YAMANAKA Natsumi
教授	越原 一郎 KOSHIHARA Ichiro	教授	竹田 徳則 TAKEDA Tokunori	職員	牧野 弘実 MAKINO Hiromi

編集後記

総合科学研究所だより33号をお届けいたします。本号では令和2年度の地域貢献事業、機関研究の活動報告が掲載されています。また令和3年度からスタートした機関研究、プロジェクト研究の計画も示され、コロナ禍においても地道に継続されている本研究所の事業ならびに研究活動についてお伝えすることができました。執筆いただきました関係者の皆様に感謝いたします。コロナウイルスの影響が長期化する中、「コロナ禍だから」という理由は次第に通用なくなり、「コロナ禍でも」という前向きな姿勢が必要になってきたと強く感じます。今後とも本研究所の研究活動ならびに地域貢献活動における皆様の積極的なご参加をよろしく願いいたします。(文責：山中なつみ)